

主 題：私たちは同じ主を信じる

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章10節

コリント人への手紙第一1章10節をご覧ください。コリントの教会は確かに多くの問題を抱えていました。霊的に幼稚な世俗的な教会であったことは皆さんよくご存じのことです。しかし、パウロはこの教会を愛していました。10節の初めの「兄弟たち。」ということばがそのことを表わしています。どんなに問題があったとしても、パウロは彼らが、すべての信仰者ですが、神に喜ばれる者として成長することを心から願っていたということは言うまでもありません。確かに、問題はあるけれど、パウロはこのコリント教会の兄弟姉妹たちひとり一人が主によって成長することを願っていたのです。

そのために、パウロがしたことは、私たちが学んで来たことですが、神がくださった祝福をもう一度彼らに思い起こさせることでした。どのような祝福をクリスチャンはいただいているのか？神に対する感謝は私たちクリスチャンの歩みの大切な動機だと思いませんか？神の恵みを覚え恵みに感謝するゆえに、私たちはそれにふさわしく生きていこうとするのです。だから、私たちの信仰生活を振り返ってみて気付くことは、ある時は私たちは神の恵みを大いに喜んでいたにも関わらず、時間の経過とともにそれを失ってしまっていることです。恵みを当然のこととってしまっていて、かつての感謝が薄れてしまっていて、ときには感謝のない生活を送ってしまっている。そのようなことを皆さんも経験しておられるかもしれません。

パウロもペテロも、また、多くの信仰の勇者たち、そして、何よりも神ご自身が私たちの弱さを私たち以上に知っておられます。私たちは常にそのことを思っていなければすぐに忘れてしまう者です。そこで、パウロはこのコリント教会のクリスチャンたちに神の恵みを列記したのです。それが終わった後、10節に「さて、兄弟たち。」と、本題へと話を展開していきます。パウロはこのコリント教会のクリスチャンたちが主に喜ばれる歩みをするために、まず、彼らの罪を、彼らの間違いを指摘した上で、彼らを正しい方向へと導いていこうとするのです。そのことを見ていきますが、今日は10節しか見ることが出来ません。

A. パウロの懇願

10節にはパウロのコリント教会の兄弟に対する「一致への懇願」が記されています。今日見るのは、教会として一致すること、その大切さを懇願するパウロのメッセージです。コリント教会が一つとなるように、もちろん、これはパウロだけの願いではなく、すべての信仰のリーダーたち、もっと言えば、神ご自身が望んでおられることです。10節「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。」「お願いします。」ということばが書かれています。これは「懇願する、嘆願する」という意味で、また、ある辞書には「～するように説き勧める、勧告する」という意味を示しています。聞いている人たちに「このようにしてほしい」と、彼らを説き勧めていくのです。パウロ自身が何とかこのような信仰者になってほしい、このような教会になってほしいという願いをもってこのことばを記していることは明らかです。

確かに、パウロの強い願いが見て取れますが、同時に見ていただきたいのは「私たちの主イエス・キリストの御名によって、」ということばです。パウロはこのことばを加えています。パウロはこの教会を開拓しました。そこに1年半いました。ですから、彼自身使徒でもあったから「こうしなさい」と命じることが出来ました。でも、パウロは命令しないで願っています。「言われたからやった」という心の態度が神に喜ばれないことを知っているからです。大切なことは、私たちがそのことを「心からする」ことです。彼は彼らを愛するゆえに、このように「勧め」をするのです。

ただ、このことが余りにも重要であるゆえに、パウロは「私たちの主イエス・キリストの御名によって、」と言いました。「御名」とは「名前」です。訳者はこれが「イエス・キリスト」であるから「御名」としたのです。ですから、「御名」とは「主ご自身」を指します。主の人格も品性も主のみこころもすべてです。つまり、パウロは「これは私の個人的な見解ではない。主ご自身のみこころそのものだ。」と、そのことを明らかにするのです。

神ご自身が「あなたがたがひとつであること」を願っておられます。ですから、パウロはこうして「これから私が言うことは神のみこころに照らし合わせた上で、あなたがたの正しくないこと、間違っていることを指摘し、正しい方向へ、神のみこころに沿った方向へと私はあなたがたを導いていきたい」と、そのようにパウロは願っていたのです。実は、このことは私たちにとってもとても大切なことです。私たちのすることすべてをみことばに照らし合わせることが必要です。まさに、聖書は私たちの

生き方の規範、ルールブックです。何かのスポーツをするとき、私たちはルールに従ってしなければなりません。車の運転もそうです。ルールを守ることが必要です。新しく生まれ変わった私たちにとって、この聖書は私たちのルールブックです。神がこのように生きていきなさい、このように歩みなさいと教えてくれるのです。それに基づいて私たちは生きるのです。

かつて、私たちは自分のやりたいことをしたいと思っていました。しかし、救われることによって、今度は「神が喜ばれることをしたい」と願う人へと生まれ変わりました。残念なことに、私たちはすべてにおいて神が喜ばれることを選択しているとは言えません。その願いがありながら、私たちは自分のしたいことを選択しています。そのように私たちは繰り返しています。もし、私たちが神が喜ばれる歩みをしたいと願うなら、このみことばのルールに従って行くことです。みことばの教えに従って行くことです。それこそが神の前に正しい生き方です。それこそが永遠に価値のある生き方です。それこそが私たちにできる最高の生き方です。げなら、この生き方こそ神の栄光を現す生き方だからです。もっと言えば、このような生き方をしている者だけが、この地上にあって神が与えてくださる最高の幸せを経験するからです。

さて、パウロは彼らに懇願しました。四つのことを記しています。一つ目は「みな一致すること」、二つ目は「仲間割れすることがないこと」、三つ目は「同じ心を完全に保つように」、四つ目は「同じ判断を完全に保つように」、これらがパウロがコリント教会の人たちに願ったことです。一つずつ見ていきましょう。

1. 一致すること

「どうか、みな一致して、」、「一致する」ことに関して、ある人はこのように考えます。お互いに妥協しながら何とか集まって…と。確かに、コリント教会はいろいろな問題を抱えながらも彼らはともに集まっていました。そして、そこで聖餐式も行っていました。でも、本当に一致していたかと言うと、そうではなかったのです。もし、一致していたならわざわざ「一致するように」とは勧めません。

ですから、皆が集まるとか、集まっても皆が妥協し合うと、そのようなことを言っているのではないことは明らかです。ここで言われている「一致」は「神の前における一致」、「神にあっての一致」です。

1) 一致の大切さ

(1) 初代教会の例 : 一番良い例はペンテコステ以後の初代教会の様子です。使徒の働き 2 章を見ましょう。ペンテコステのとき、ペテロがメッセージをします。そうすると、三千人ほどが弟子に加えられたとあります。その大きな集まりですが、2 : 46には「そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、」と書かれています。これが初代教会の様子でした。見ていただきたいのは「心をつにして宮に集まり、」です。彼らが宮に集まったのは主を崇めるためであり、主を礼拝するためであり、主を証するためです。彼らが集まって主を崇めていることは、それを見ていた人たちへの大きな証になります。彼らが崇めている神、彼らが愛している神を人々が見るからです。

私たちも同じです。こうして礼拝に集まったときに私たちが望むことは、心から神を礼拝することによって、周りの人たちが私たちの信じている神を知ることです。この初代教会において信仰者たちは「心をつにして宮に集ま」っていた、つまり、彼らは神に喜ばれる、神を心から崇める、神を心から礼拝すること、その心において一つになっていたのです。この宮は社交場ではなかったのです。彼らの集まりは神の栄光を現すこと、そのことを目的とした集まりでした。人々はその願いをもって集まっていました。確かに、この群れは一致していたのです。このような一致のことを今見ているのです。

ひとり一人の目が神の方を向いているのです。ひとり一人の信仰者が神に喜ばれることを願っているのです。神を崇めることだけを考えているのです。なぜなら、私たちはみな礼拝者として生まれ変わったからです。ここに集まったときだけでなく、礼拝者として私たちは日曜日から土曜日まで生きています。ここに見られる一致は、みな心から神を礼拝すること、その思いをもって彼らは生きていたことによるのです。

この彼らの集まりを神は喜んでおられるとそのように断言できるみことばがあります。46 節に続いて 47 節「神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。…」と。この人たちは心をつにして宮に集まっていました。神を礼拝したかった、神を崇めたかったのです。そうして、彼らは主の十字架を覚えていたのです。彼らの心の中には喜びがありました。その喜びが賛美を生み出していました。彼らの生きざまがすべての民に良い影響を及ぼしていたのです。この人たちのうちに喜びがあったのは神が喜んでおられたからです。この人たちの歩みが神の前に喜ばれていたゆえに、彼らはいつも喜びをもって生きていました。ご存じのように、御霊の実は「愛、喜び、平安…」です。だから、クリスチャンが喜びをもって生きているということは、その歩みが神の前に正しいからです。自分の欲しいものを手に入れて一瞬

だけ感じる喜びとは違うということはお分かりですね。この世から得る喜びは一瞬のうちに消えてしまいます。でも、神がくださる喜びはどんなときでも喜ぶことができるものです。神だけが与えることのできるものです。

この兄弟たちはその喜びをもって生きていたのです。そして、神が彼らを喜ばれたゆえに、「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」、この教会を神は信頼したのです。この教会に民を任せて良し

とされてこの教会に多くの民を加えてくださったのです。確かに、この教会は一致していたのです。

「いやなことは言わないでおこう、いやなことは見ないでおこう」と、そんな妥協した集まりではなかった。彼らは一つになっていました。それはみな神を礼拝すること、その思いをもって生きていたのです。だから、神はそのことを喜ばれ、この教会を喜ばれたのです。

(2) **ダビデの証** : 旧約聖書においても、ダビデが「主を信じる者が一つになること」の大切さを教えています。このように記しています。詩篇133:1「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんといい楽しみであろう。」、人々が祭りのときに主を礼拝するためにエルサレムに集まります。そして、集まった者たちが心を一つにしていること、それがどんなに幸いなことか、その祝福をダビデは二つのことをもって表しています。2-3節に「:2 それは頭の上にそそがれたとうい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたる。:3 それはまたシオンの山々におけるヘルモンの露にも似ている。【主】がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。」と、「油」と「露」という二つのたとえを使って祝福を表すのです。

「油」 : 出エジプト記29:7、30:25、レビ記8:12に「油」のことが記されています。出エジプト記29:7「そそぎの油を取って、彼の頭にそそぎ、彼に油そそぎをする。」、30:25「あなたはこれらをもって聖なるそそぎの油を、調合法にしたがって、混ぜ合わせの香油を作る。これが聖なるそそぎの油となる。」、レビ記8:12「また、そそぎの油をアロンの頭にそそぎ、油をそそいでアロンを聖別した。」、香料を混ぜて特別な油を作り、それを祭司の上に注ぎます。祭司の先祖であるアロンの上に注ぐのです。

「露」 : ここで言っているのは、その特別な油が滴り落ちて来る様子です。滴り落ちる油は「…ヘルモンの露にも似ている。」と祝福が広がっていくようだというのです。神の民が一つになっているのは神の祝福がそのようにすべての人に及んでいくようだというのです。この「シオンの山々におけるヘルモンの露」というのはパレスチナにおいては非常に重要なのです。露が小川となりやがて川となってパレスチナの地を潤すからです。

言わんとしていることは同じです。神を愛する者たちが一つであることの大切さです。それを神はお喜びになりそこに祝福をお与えになる。そのことを言うのです。ですから、旧約聖書を見ても新約聖書を見ても同じことを言うのです。神を愛する者たち、神の救いに与った者たちが一つであることの大切さです。パウロは「みな一致して、」と言いました。救いに与った者たちが一つになるように、ひとり一人がしっかり神を見上げて、神に贖われたひとり一人が神に感謝して、神を愛し、神を崇めながら生きるようにと。そのときに霊的な一致があるのです。みなが見ている方向が神だからです。そのことが神のみこころだということはいまもありません。

パウロは問題のあったピリピ教会に対して、こんなことを言っています。ピリピ4:2「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください。」と。いかに一致することが大切か、それがみこころだということをお私たちに教えます。パウロは同じことをこのコリント教会にも告げるのです。

2. 仲間割れしないこと

この「仲間割れ」ということばは「分裂、対立、裂け目」ということです。彼が望んだことは、教会の中に分裂が存在しないようにということです。でも、実際には教会には分裂があったのです。パウロはIコリント11:18で「まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。」、パウロもよく知っていました。そして、彼はその後そのことを話しています。悲しいことに、この教会にも分裂があったのです。でも、分裂を経験している教会はここだけではありません。どの時代でも、どの場所でも、悲しいことに、クリスチャンが集まっているそこにも分裂があるのです。人が集まるとそこに問題があることは言うまでもありません。クリスチャンが集まった、神を愛する者が集まっている、そこにも分裂が存在するのです。この教会もそうでした。

1) **分裂の原因** : では、なぜ、分裂が存在するのでしょうか？分裂が起こるのでしょうか？その原因は二つ考えられます。

(1) 霊的未熟さ = 信仰の未熟さが分裂をもたらします。Iコリント3：1-3をご覧ください。ここでパウロは「キリストにある幼子」という表現を使っています。また、「肉に属する人」と同じ意味で使っています。つまり、信仰的に非常に幼い人、霊的に幼い人のことです。「:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」、このコリント教会が霊的に幼い状態にあることを述べています。では、この人たちの歩みがどうだったのか？「:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。」と、教会の中で、クリスチャン同志がお互いにねたみを抱いている、お互いの間に争いが生じる、これはもう「肉に属している人」の特

徴だ、信仰者として幼子の特徴だ、霊的にまだまだ未熟な特徴だと言います。まさに、この分裂というのは肉の働きだとパウロは言います。

よく皆さんもご存じのところですが、パウロが「御霊の実」と「肉の働き」を対比している箇所があります。「御霊の実」が九つありましたが、その前にガラテヤ5：19-21に「:19 肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、:21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」、ですから、みことばは明確に、たとえば、クリスチャンの集まりにあって、兄弟姉妹の集まりにあって、分裂や分派を起こしているのは、霊的な行いではない、肉的な行いである。霊的な人が為すことではなく、そうでない人が為すことだと言います。

こういうことです。教会にはいろいろな人が集まります。霊的に成熟した人もまだそうでない人もいます。分裂が起こった原因の一つには、霊的に弱い人たちが、好き嫌いが明確になっていくなど、いろんなことで声を上げることによって、同じように信仰的に弱い人たちがそれに同調し始めるのです。そういうことは起こり得ることです。恐らく、この教会の中でもそういうことが起こったのでしょう。なぜなら、皆まだ信仰的に成長していなかったからです。この後見ていくなら、自分の好みの人がいるのです。パウロが良かったりアポロが良かったりと。そのように自分というものが前面に出ているような状態です。これは本当に信仰的に幼い状態ですが、そういう人たちの影響によって教会がこのような分裂や分派を経験していたのです。少なくとも、教会の中に存在するこのような悲しい分裂や分派は、こういう信仰的に非常に幼い人たちによってもたらされるということが言えます。

(2) 罪 = ヤコブがヤコブ書4章でこんなことを言っています。4：1-2「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。:2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」と。結局は「自己中心的」なのです。自分を世界の中心に置いてしまうのです。自分の思い通りにならないければ憤りを覚えるのです。また、自分よりもだれかが良いものを持っていたり、自分よりも恵まれていたり、自分よりも幸せそうだったらねたみを抱くのです。まさに、そのことをヤコブは教えているのです。私たちは注意しなければいけないのです。

今日のテキストが私たちに教えてくれるように、仲間割れすることがないようにと。私たちは自分のことを優先するよりも、人のことを優先するのです。前回、私たちが見て来たように、神がくださった祝福を見てください。私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられた。「コイノニア」ということを学びました。それは相手のために自分自身を捨てることでしょう。周りの人の成長のために自分が尽くしていくことです。あなたの愛する周りの人たち、この人たちの信仰の成長のためにあなたはベストを尽くそうとするのです。自分を中心に置いている人は「私のために何をしてくれるのか？」と言います。「だれも私のために何もしてくれない」と言うのです。フォーカスが自分に向けられているからです。でも、私たちはそういう生き方をする者ではないのです。救いに与った私たちは今度は神のために、そして、人のために生きる者へと生まれ変わったからです。こうしてすべての中心に自分を置いてしまうこと、自分の考え、自分の思い、自分の好み、そういうものを私たちが優先するときに、悲しいことに、このような仲間割れということが生じてしまうのです。

私たちが覚えなければいけないことは、教会がそのような分裂した状態にあったなら、神が悲しまれるだけでなく、私たちが一番望んでいる福音宣教にも大きな障害となるということです。なぜなら、そのような信仰者の歩みを、そのような群れを神が悲しまれるからです。先ほど見た初代教会は神が喜ばれました。なぜなら、彼らは霊的に一致していたからです。みな神を見上げて、神を喜び感謝し、神の

栄光のために生きていたからです。このコリント教会が見ているのは神ではなくて自分たちでした。そして、いろんな分裂、分派ができていたのです。

2) 分裂への警告 : このような分裂に対して、本来、教会というのは一つになる所ですから、今、話したように、パウロはIコリント12:25で「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。」と言っています。教会はみなが集まったときに互いに傷をつけ合う所ではないのです。いたわり合う所、励まし合う所です。もちろん、罪があればそれは正しくないことを指摘することも愛です。正しく歩んでいくために、ちょうど、パウロがするように、教会とはいたわり合う所です。でも、悲しいことに、そのような教会が、このようにあるべきはずの教会が分裂や分派を経験してしまうのです。パウロはこう警告します。

ローマ16:17「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまづきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。」と。もちろん、そういう人たちがいるならば、それは間違っていることを明らかにしなければいけません。でも、それでも問題を起こすのであれば「遠ざかれ」と警告します。それは神の栄光に全く役に立たないからです。ですから、パウロは仲間割れすることがあってはいけない、あなたがたは主によって救われたのだから、しっかり主を見て、そして、人々のために生きていくようにと言うのです。

テキストに戻って、その後こう続きます。「同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」。この「完全に保つ」ということばは新約聖書中に13回出て来ます。「破れているものを繕う、直す」という意味です。マタイ4:21、マルコ1:19には「網を繕っていた」ということばで書かれています。弟子たちが網を繕っていたのです。網が破れたのでそこを補修するわけです。また、Iテサロニケ3:10には「私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。」とあります。信仰の不足を補う、足りないものを満たすということです。

ですから、「完全に保つ」というのは「ものを正しい状態に回復させる」という意味で使っているのです。破れた網が元の状態に戻るように、足らなくなった部分が補われるようにと。ですから、骨や外れた関節であったり、壊れた道具類が元の正しい状態に戻る、そういう意味がこのことばにはありません。

ですから、パウロは3番目と4番目にこのことを願うのです。今まであなたがたがあった元の状態に戻るように、新しい状態ではなく、かつてあなたがたがそうであったように、そこに戻るように、その状態に戻るようにと、そのことを勧めるのです。

3. 「同じ心」を完全に保つこと

「同じ心」とは「考え方や思い」です。私たちがイエスを信じてこの救いに与った時に、神は私たちの心を変えてくださいました。それまでの私たちは自分がその中心にいました。でも、救いに与ったことによって、主が私たちに中心におられ、私たちはその方にすべてをお委ねして生きていこうと、そのような歩み始めることになったのです。ですから、皆さんの祈りの中に「主よ。どうか私を支配してください。どうか私を支配し続けてください。私を導いてください。」という祈りが頻繁になされるのです。なぜなら、頻繁に必要なからです。でも、これは正しい祈りであって、私たちは新しくされた者として私たちの新しい心が神によって支配されることを願うからです。心が正しければ正しい行ないが生まれるからです。心が正しくなければ正しくない行ないが生まれて来るのです。パウロが望んだことは、「同じ心を完全に保って欲しい」です。かつて、あなたがたは救いに与った時、自分たちの心を常に主に明け渡して主に支配していただいて、主に導かれることを望んで歩んでいた。自分の考えではなくて主の考えをあなたがたは求めていた。それに沿って生きていこうとしていたからと言うのです。

私たちが望むことは、主が私たちを支配してくださることによって、主が持っているその思いが私たちの思いになることです。主のみこころを求めていない人たちは、自分の思いが神のみこころになることを求めるわけでしょう。自分のやりたいことをやっていきたい人は、この願いがみこころになりますようにと、そのようにはっきり祈らないかもしれませんが、そういう願いがあるのです。これがみこころであつたら良いな…、この願い事が叶えば良いな…と。それを私たちがなかなか捨て切れないというのは、それが自分の思っているベストだと考えるから、本当の意味で最善と思っているからです。

私たち信仰者は、すべてをご存じの神にすべてを委ねることができます。そして、神だけがご存じのベストを私たちに提供してくださるのです。ですから、私たちにはいろんな願いがあるいろんな考えがあります。でも、それを神に委ねて「神さま、どうかあなたのみこころを成してください。私はこれがベストだと思いましたが、そうではなければどうか除いてください。なぜなら、あなたのベストだけがベストだからです。」と、そのようにして神に信頼することを学ぶのです。頭では神は最善を為すと分かっている私たちが、このように生き方をもって、確かに、神だけが最善を成されるのだと、その確信を持って生きる人へと変わっていくのです。

ですから、「同じ心を持って」ということは、主にすべてを明け渡して主の考えが私たちの考えになるように、主が望んでいることが私たちの望みになるようにと、そうして私たちはすべてを主に明け渡していこうとするのです。このような考えを持つ時、私たちの肉はこう言います。「そんな堅苦しい生活…、そんな生活をして本当に喜びがあるのだろうか？」と。皆さんが証し人です。どうですか？すべてを神に明け渡して生きる生き方とは最高の生き方ではありませんか？心の中で「そうだ！」と確信されていることを期待します。そうですね、皆さん！この地上のものをどれほど手に入れたとしても、神の祝福はこの世のものによっては得ることはできないからです。神の喜びさえ私たちがいただいたら、この世で何があろうとなかろうとそんなものに関係なく私たちは喜びをもって生きることができるのです。そんな歩みができるし、そんな歩みこそがこの私たちの神を証する生き方なのです。

パウロが言うことは「あなたがたが救いに与ったときにすべてを主に委ねて、そして、主に支配されることを願いながら歩んでいた。その心をもう一度思い出すべきだ。」です。

4. 「同じ判断」を完全に保つこと

「同じ判断」、これはちゃんと見極めていくということです。つまり、ここでパウロが言っていることは、いったい何が神の前に正しくて喜ばれるのかをきちんと判断することができるということです。思い出してください。信仰を持ったとき、皆さんは何か神に喜ばれたいという思いを持っていました。ですから、何かをするときに「これは神に喜ばれるかな…？イエスさまが喜ばれるかな…？」と、そのことを考えて選択したはずです。最初に見たように、それがずっと継続するわけではありませんね。いつの間にかそういう生き方を忘れてしまいます。恐らく、コリントの教会の人たちもそうだったのでしょう。彼らが救われた最初に望んでいたことは「神に喜ばれることをしていきたい」です。でも、いつの間にかそういうものから離れてしまったのです。

同じ判断ができるように。その判断をするために必要なのは「聖書」です。私たちの判断とは、私たちがどう思うのか、どんな経験をしたのかではなくて、聖書が何を言っているのかとそこに立つのです。先ほども話したように、神が喜ばれるかどうかは、私たちがどう思うかではないのです。この聖書に記されている神のみこころに照らし合わせてどうかなのです。私たちはよく「みこころ」ということばを利用するのですが、敢えてそう言いますが、「みこころ」ということばが使われることによって、そのデスカッションが止んでしまう、「だってみこころなのだから…」と。でも、往々にして「みこころ」と言いながら神のみこころに反することがみこころだと信じ切っているケースがあります。

みこころとは「神のみことばに沿ったもの」です。だから、私たちはこの神のみことばを知らないといけないのです。神のみことばを知ることによって、そして、そのみことばを実践することによってその人は成長します。成長するとどうなるのか？成長したクリスチャンはその判断ができるのです。何が神の前に正しいのか、あるいは、そうでないのかを判断できるのです。それによってその人が成長しているかどうかを判断できるのです。そのようにヘブル書の著者が言います。ヘブル書5：14です。先ほど見たように、堅い食物のことが出て来ます。乳を食するのは幼子であって堅い食物を食するのは大人であると見ました。霊的な意味です。「しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」と。「経験」と言っても、人生のいろんな経験のことを言っているわけではありません。なぜなら、12節に「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。」と書かれているからです。13節に「まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。」と続きます。こうして文脈を見た時に、明らかにこの著者が言いたいことは、大人というのは神のみことばをもって何が神の前に正しいかそうでないかを判断できる人だということです。それが大人であり、それが霊的に成長した人の姿なのです。

私たちはそのように成長した者として、霊的に大人として、益々成長していくことを願いながら生きることです。その願いをもって生きることは正しいことなのです。もっと自分は成長したい、あなたが成長すれば、あなたはもっとイエス・キリストのすばらしさを世に証するからです。あなたが成長すれば、あなたはもっとこの神が約束された祝福を実際に経験して生きるからです。神が約束された喜びをもって、神が約束された平安をもって、神が約束された感謝をもってあなたは生きるわけで、その時にあなたはもっと人々の前で確信をもってこう言うでしょう。「主によって救われたことはすばらしい！主によって生かされていることはすばらしい！」と。パウロはもう一度そこに立ち返りなさい、もう一度そこに戻るようにと、そのことを願っているのです。

今日のテキストをもう一度見てください。パウロはこのコリントの教会のみんなが霊的に一致することを願いました。一人ひとりの信仰者がしっかり主を見上げて歩いていくように、彼らが自分を中心に見てしまうのではなくて、その過ちから分裂、分派を作り出すことが決してないようにと願います。私

私たちはだれのために生きているのか？神のためであり、そして、隣人のためです。そのことをもう一度しっかりと覚えて、あなた自身が一致を生み出す働き人として生きることです。そして、かつてあったようにあなたが同じ心、主にすべてを委ねて主に心を支配していただくことを願いながら生きて、そして、神のみことばに立って、何が神の前に正しくて喜ばれることかをしっかりと判断できる、そのような人に立ち返りなさい、かつてのあなたに戻りなさい！と、このようにパウロは彼らに勧めるのです。

一致することの大切さは言うまでもありません。皆さんご存じのことです。成長している人なら、みなそのことを知っています。問題は、そのためにあなた自身がどのような働きをしているかです。まず、あなたが一致を作り出す者になることです。あなたが成長していくことです。あなたの口から人に対する悪口、批判、そのような一致を生み出さないことばを出さないことを決心することです。神の助けをいただきながら、私たちは人の徳を高めるためにことばを話すべきです。

パウロはピリピ教会にメッセージを送っています。なぜ、ピリピ教会なのでしょう？先ほども見ました。教会の中に分裂、分派があったからです。その教会に対してパウロはメッセージを送りますが、ピリピ2：1から見てください。「1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、」、「もし」ということばに注意してください。日本語には訳されていませんが、正確に言うならこうです。「もしキリストにあって励ましがあ、もし愛の慰めがあり、もし御霊の交わりがあり、もし愛情とあわれみがあるなら、」と、これは「あるかないか？」ではなく、確実にこの人たちに「ある」ことを言ったのです。これらが彼らのうちに備わっているのです。その上でパウロは「2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と一つになるようにと願うのです。そのために「3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

あなたが一致を生み出す者となるために必要なものは何か？「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と、このことです。この「自己中心」ということばは「敵意、悪意、対立の感情」の意味です。内側にあるだれかに対する敵意や悪意、その人と対立するような感情のことです。また、ある辞書は「ねたみやライバル心に伴う怒りや憤りの感情」と定義しています。だれかを見てその人にねたみを抱いたり、ライバル心を燃やす、そういうものを持つことによって「なぜこの人ばかり…」という怒りや憤りの感情がもたらされるのです。

ここに書かかれてあるこの人の心の状態がよく分かります。そこに愛はないのです。そこにあるのはこのような正しくない感情です。そういうものを持っているならば、必ず、そこには分裂が出て来るのです。自己中心から何事もしてはならない、そういう怒りをもった状態で何かをしてはならないのです。「虚栄」ということばがあります。「見栄を張りたがること、見栄」です。すべてのフォーカスが自分に向けられているのです。もしそうなら、私たちは決して、ここに書かれているように彼らに対してへりくだった態度で接する事ができません。却って、高慢な態度で接します。彼らを見下すのです。

みことばが教えることは「それは違う！」です。一致を生み出したなら、まず、あなたの心が大切であり、心の中に悪がないかどうか、同時に、人々に対してへりくだって、彼らがあなたよりも優れたものであるとそう思うことです。

皆さん、私たち信仰者は、周りの人たちが私たちのことをどのように評価するのかはどちらかと言うとどうでも良いことです。私たちがしっかりと覚えなければいけないのは、評価していただきたいし、また、評価を覚えるのは神からの評価です。私たちは人の目を意識して生きるのではありません。神の目を意識して生きなければいけません。この方に対して責任を負っているのです。

信仰者であればそのすばらしい神の恵みを覚えて、その救いに与った者として、この神を称えながら生きることです。そして、あなたがへりくだって人々に仕え、人々のためにすべての働きをするならばあなたは分裂をもたらす人ではなくて一致をもたらす人です。あなたの心をいつも神に支配していただき、そして、神の知恵によって神の前にどの選択が正しいのか、何が神の前に喜ばれるのか、そのことを考えながら生きていく、そういう信仰者でありなさい、そういう信仰者にもう一度立ち返りなさいと、それがパウロがこのコリントの教会に送ったメッセージです。

今の私たちにも必要です。一番厄介なのは自分の心ではありませんか？みことばを聞いても聞いても、私たちの心はそれに反発するのです、「私の思い通りに生きていきたい」と。主の助けをいただきながらみことばに従うことです。それが私たちが成長する術です。このみことばをしっかりと心に刻んでこの1週間、人々の成長のために生きてください。あなたが祝福をもたらす人として神に用いていただくこと、そのことを心から願います。